POLE

第１０９号
北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2023.5.1

第 1558 回 札幌市民劇場

北海道ポーランド文化協会 創立35周年 記念演奏会

Hokkaido-Poland Cultural Association 35th Anniversary Concert

Chopin & Poland

ショパンと華麗なるポーランド音楽

2023. 6/3（土）

開場 18：00
開演 18：30

札幌コンサートホール
Kitara 小ホール

北海道ポーランド文化協会創立 35 周年の節目に、ポーランドの作曲家たちの作品を取り上げます。

演奏は、日々ポーランド人作曲家の作品を研究し、道内外で活躍している、会員である演奏家たちです。

第１部は、ショパンの名曲を集めたオールショパン プログラムです。

第２部は、お話「近年のショパン・ブーム」に続いて、声楽やヴァイオリン、２台のピアノや連弾など、さまざまなアンサンブルを通して、素朴で美しいポーランド音楽を心ゆくまで味わっていただけたら幸いです。

皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

◆出演者 （ピアノ）徳田貴子、本田真紀子、田口綾子、西村範子、中島幸治、坂田朋優、鈴木飛鳥、水田香、北浦由花里
（ヴァイオリン）徳田和可、(声楽) 高橋可奈子、松井亜樹
（ピアノ伴奏）安藤むつみ、畑端梓、高橋健一郎
（お話）三浦洋（北海道情報大学教授）=右写真=

ショパン

◆曲目 （ピアノ）ショパン 華麗なる大円舞曲 変ホ長調、エチュード ハ短調「革命」、「4つのマズルカ」より 第1番 ト短調・第2番 ハ長調・第4番 変ロ短調、バラード 第2番 へ長調、舟歌 嬰ヘ長調、前奏曲 変イ長調、ポロネーズ 変イ長調「英雄」、2台のピアノのためのロンド ハ長調
モシュコフスキ ポロネーズ ロ短調、クラコヴィアク ト長調
（ヴァイオリン）ヴィエニャフスキ 華麗なるポロネーズ 第1番 ニ長調
（声楽）カルウォーヴィチ「広い、広い海原を」、「失意」、「穏やかで明るい黄金の日々を」、「最初の星々輝く」、「一番美しい歌の数々」
ショパン「願い」、「メロディ」

モシュコフスキ

入場料 2,000 円（全席自由、当日券同じ）

お問合せ・予約先：
hokkaidopolandca@gmail.com
011-556-8834（安藤）

カルウォーヴィチ

ヴィエニャフスキ

新会員のひと言

憧れのヴァイオリニスト ヴィエニャフスキ　徳田 和可

皆様、初めまして。新会員の徳田和可です。(「徳」は、正しくは心の上に「一」が入る「德」ですが、たまに表示・変換されなかったりするので、どちらでも構いません。私自身もメールでは「徳」で打つこともあります。)

まずは、少し自己紹介をさせてください。

担当楽器はヴァイオリンで、4歳から習っています。同時にピアノも習っていて、小学生から高校生まで安藤むつみ先生に習っていました。ポーランド協会入会は、安藤先生に誘っていただいたことがきっかけです。札幌大谷大学の研究生を修了し、今は母校の藤女子中学・高等学校の音楽の非常勤講師、個人的にヴァイオリンの指導も行なっています。

記念演奏会ではヴィエニャフスキの「華麗なるポロネーズ第一番」を演奏させていただきます。この曲について少し紹介させてください。

ヴィエニャフスキといえば、驚異的な技術をもつ名ヴァイオリニストということが浮かびます。それは、あの有名なパガニーニ並みと言われています。ヴィエニャフスキは、テクニックだけではなく、表現力も素晴らしかったと言われていて、ヴァイオリン弾きとしては大変憧れる作曲家・演奏家になります。ポーランドの風を感じながら精一杯演奏させていただきたいと思っています。

これからどうぞ宜しくお願い致します！(とくだ・わか)

ポーランドの地に想いを馳せて　鈴木 飛鳥

この度、入会させていただいた鈴木飛鳥と申します。私は、ロシアのサンクトペテルブルクとモスクワに留学していましたが、いつかはポーランドの地を訪れてみたいと思いながらも、結局は実現することが出来ないまま、帰国することになりました。

ピアノを弾く人にとって、ショパンは特別な作曲家であり、また、ショパンの祖国であるポーランドにも、憧れのような気持ちがあります。今回、こちらの協会に入会させて頂いたのを機に、ポーランドの文化に触れたいと思っています。そして、ショパン以外にも、以前からシマノフスキの作品などにも興味がありましたので、ぜひ取り組んでみたいと考えています。

6月にキタラ小ホールで開催される創立35周年記念演奏会では、モシュコフスキ作曲の「ポーランド民族舞曲集 Op.55」から第3、4曲を連弾で演奏いたします。第3曲のポロネーズは、物悲しい旋律が印象的ですが、第4曲のクラコヴィアクは一転して、非常に軽快で楽しい作品になっています。

演奏会では、ポーランドの地に想いを馳せて、心を込めて弾きたいと思います。ぜひ、皆さんにお聴き頂けたら嬉しいです。　(すずき・あすか)

憧れの英雄ポロネーズ　中島 幸治

この度、入会させていただきました中島幸治と申します。私はハンガリーへ留学しておりましたが、ポーランドのワルシャワへは、当時の留学仲間と一緒に一度だけ観光で行ったことがあります。

ワルシャワを訪れたのは約8年前になりますが、中でも印象に残っているのは、ショパンの心臓が眠る「聖十字架教会」を訪れ、ショパンの心臓が納められている柱の前で祈りをささげ、ショパンの祖国ポーランドへの思いを感じ胸が痛くなったことです。

市内の公園も散歩しましたが、ちょうど木枯らし舞う季節で北海道の景色と共通するところもあり何だかホッとした記憶があります。

6月の記念演奏会では、ショパンのプレリュードと英雄ポロネーズの二曲を演奏させていただきます。英雄ポロネーズは、力強いリズムと優美なメロディーでショパンのポーランドへの愛国心が感じられる曲でとても大好きな曲です。

私が初めて英雄ポロネーズを聞いたのは「シャイン」という映画の中でした。あるピアニストの半生を描いた作品で、当時ピアノを習い始めた私にとってはとても衝撃的な映画でした。

憧れの英雄ポロネーズを初めてステージで演奏させていただけることに感謝しながら、聴いて下さる方の心に届くよう精一杯演奏させていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。　(なかじま・こうじ)

新刊紹介

『ショパン～プリンス・オブ・ザ・ロマンティクス』

アダム・ザモイスキ（著）大西直樹; 楠原祥子（訳）音楽之友社 2022.10

ショパンの人生や作品について日本語で書かれた本は、訳書も含めて百冊近くになると推察されますが、また新たな１冊が誕生しました。ポーランドの大貴族の家系を出自とするアダム・ザモイスキが 2010 年に刊行した英語版 Chopin: Prince of the Romantics の和訳です。ザモイスキは 1979 年にもショパンの伝記 Chopin: a Biography を著わしており、この新著は新たな資料をまじえた改訂版という位置づけになっています。

旧著と同様、一次資料に基づいて事実を年代順に追い、ショパンの人生を誕生から最期まで再現するような記述は克明で、極めて密度が高い内容です。簡単に読み流せる文章ではないものの、著者の力強い筆致に読者は引き込まれることでしょう。

つとめて客観性を保とうとする叙述のため、何らかの意味で評価に関わる事柄は慎重に述べられています。ショパン自身も交流のあったザモイスキ家の末裔であればこそ、誇張して語られがちな楽聖像からは距離を取り、真実を再現しようとしているのだと思われます。

エルスネルとクルピンスキ

目を引く内容としては、まず、ショパンにとって音楽上の師に当たるユゼフ・エルスネルとカロル・クルピンスキとの対立が挙げられます。ドイツ音楽を模範とする前者とイタリア音楽を崇敬する後者との間には考え方の違いがあり、その争いに若きショパンが巻き込まれていたことを筆者は初めて知りました。

それに劣らず衝撃を受けたのは、ショパンの親友として知られるユリアン・フォンタナが1842年5月、ポーランドにいる妹に宛ててパリから送った手紙の内容です。「僕は人生を開いてくれるはずの一人の友に頼ってきた。でも、その人はいつも不誠実で偽りだらけだった。彼の影響から離れたくてパリを去ることまでしてみたが、良いことは少しもなかった」という文面に実名はありませんが、内容からショパンを指していることは明らかです。筆者が知る限り、この手紙がこれまで日本語の活字になったことはありません。

もう一人、ショパンが頼っていた年上の友人アルベール・グジマワがロシアのデカブリスト（十二月党員）とつながりを持ったため、ロシアで投獄された経験を持つことも、あまり知られていない事実ではないでしょうか。

シューマン、クララ、メンデルスゾーン

もちろん、明るい出来事も多数あります。1835年10月、一時婚約していたマリア・ヴォジンスカのいるドレスデンを訪れたショパンは、パリへの帰路、ライプツィヒに立ち寄り、ロベルト・シューマン、クララ・ヴィーク、フェリックス・メンデルスゾーンと対面しました。結婚を控えていたロベルトとクララに会わせようと、メンデルスゾーンがショパンの到着を待ち望んでいたという叙述からは、いかにもロマン派の音楽家たちらしい青春群像が浮かび上がってきます。

また、1836年10月パリのオテル・ド・フランスでショパン、ジョルジュ・サンド、フランツ・リストが一緒にひと時を過ごす場面も印象的です。女流作家サンドとショパンが出会った日にほかなりません。約9年間の生活をともにしたショパンとサンドの関係については、既に多くの評伝で語られているものの、ザモイスキの客観的な説明を読むと、ずいぶん印象が変わるように思います。

今世紀に刊行された訳書を顧みれば、2012年に春秋社から、音楽学者ジム・サムソンの研究書の和訳「ショパン　孤高の創造者～人・作品・イメージ」（大久保賢訳、英語版: Chopin. Oxford UP, 1996）が出ています。この本は、どちらかといえばショパンの作品史を中心にした叙述になっていますので、ザモイスキの著作と併読することで最新のショパン像が立体的になることでしょう。　（三浦洋）

（みうら・ひろし）1960年北海道三笠市生まれ
北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了
（博士(文学)）、2009年より北海道情報大学教授
日本ショパン協会北海道支部理事、本会会員

北海道ポーランド文化協会 創立35周年 記念演奏会

6月３日（土）の記念演奏会での三浦氏の「お話」は、「近年のショパン・ブーム」と題して、レヴェルの高かった2015年と2021年の国際ショパンコンクールにちなんだお話になります。